

一九九八年夏にみた、南ヨーロッパ都市の記憶

——「アクロポリスの丘」・「ミケランジェロの丘」・

「モンマルトルの丘」に立つて

野村 晶子

近代国家崩壊（EC統合）前に、ヨーロッパ主要都市の現状と、人々の行動を観察しておきたいと、この旅は、一九九二年（マーストリヒト条約締結の年）から始まった。

本年度は、古代・中世・ルネッサンス期・そして、近代へと、ヨーロッパ文化の流れを一望できる、南ヨーロッパ（ギリシア・イタリア・フランス）のコースを尋ねることになった。

アクロポリスの丘

K・L・M 58便で、アテネに着いたのは、八月二日（水曜日）二十三時五十五分であった。（成田を八月三日K・L・M・862便で十時十分に発ち、アムステルダムで乗り継ぎの時

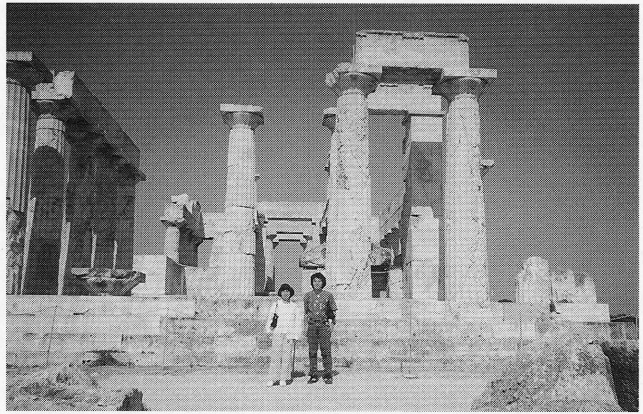
間を加えると、約十六時間三十分の飛行である。）アムステルダムからは、後部座席に若者のグループが陣取り、大声で飲み物（ビール・コーラ）や、サンドイッチなどを、ドイツ語で、スチュワーデスにねだり、他の客席のカバーを外して投げたり、自分達のサッカーボールを飛ばしたり、大笑い始める。ワールドカップからの帰還の途上であったことは、アテネ空港に降り立ってから分った。彼等は、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、そして、私が始めて耳にする言語（実は、ギリシア語であったが……）を、自在にあやつっている。あまりの行儀の悪さに、思わず、「ドイツ人？」と聞いてみた。「そうだ。」と言う。体格は立派であるし、顔立ち

は、古代ギリシアの彫像「ヘラクレス」や、「ポセイドン」を想わせる美青年達である。行動の幼稚さから、大学生ではないことは確かであった。深夜の空港に降り立ち、通関迄の待ち時間にも、例のボールを、私の足元に軽く跳飛ばして来た。「メッ！」と、日本語を添えて、返すと、「キヤッ〜。」と嬉しそうに隣ぐ有様から判断すると、高校生であったようだ。一列隣には、アムステルダム行きの人々が群をなしていた（背と鼻が高く、皆黒っぽい衣服を身につけ独特の集団的興奮は、人なつくく、控え目な雰囲気を作っている。……）。不意に、「何処から来たの？」と聞かれた。……そこには、少女（中学生らしい）が微笑んでいた……。 （背が低いので、同年

順位と錯覚でもしたのであろうか？……)「日本からです。」「英語はお話できる?」と聞いてくる。「日本は好きです。京都は魅力的です。」と、瞳が輝いている……。「私の息子よ。」と示すと、「私のママです。」と、家族の紹介になってしまった。アフロディテを想わせるユダヤ系ギリシヤ人のお嬢さんは、「すてきな旅を!」と言い残し、ママと一緒に、人々の海の中に消えて行った。

空港から、ホテル・「カラベル」へ向う途中、「アクロポリスの神殿が見える。」という添乗員の声に、左手を望むと、小高い丘の上に、真紅の照明に浮き上る、白亜のバルテノンの、神秘的な石柱群があった。深夜のアテネの街はオリエンタルな息使いをしている。低い街筋の店々には「π, Σ, Ω, θ, γ, ……」等々と、記号として、使ったことのある文字が書いてある。いささか、胸のときめきさへ禁じ得ぬ、懐しさを、ゲーテの「イフイゲーニエ」にも似た宿命的な期待感を持ちながら、第一歩を、古代・処女神の都市国家、アテナイに踏み入れたのである。

八月四日、早起きして、世界最大の建築物のひとつ、ミネルバ女神の神殿が建つ「アクロポリスの丘」に登ることになる。午前十時



アクロポリスの丘 1998年 Aug.

に、もう、気温四十二度になる。約三十五度の登り坂道は乾いて、現代と古代(現世と黄泉の世界)との関門の如く、白焰の道である。丘上には、熱射を防ぐ糸杉一本だに無いことは、心得ながら、うかつにも、水分補給を軽くみてしまった。父ゼウス神の頭を割って生まれたという「知恵の神」、「戦いの女神」ア

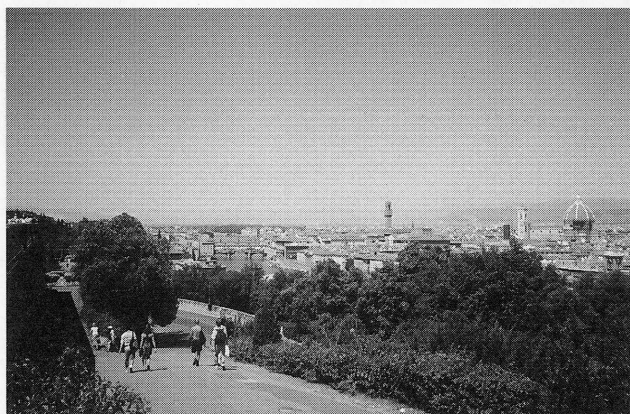
テネは、古代ギリシヤ都市国家アテナイの守護神として、ここアクロポリスの丘の神殿に祀られた。壮大な白亜の大理石の柱列と、至る処にころがる巨大な石片を確かめながら、はるか、紀元前四百六十年に生き、若者に哲学を説いたソクラテスをそして、弟子プラトンに思いを馳せ、眼下のキンタグマ広場や、古代劇場の遺跡、そして、淡水色にまどろむエーゲ海、オリンポスの神々の山々に、時を越えた感慨に浸った。民主主義の発祥地でもあるアテネに生きながらも、ソクラテスは一票の差で毒殺されたのである。丘から降りて、ゼウスの神殿跡、アテネ・アカデミアも見学し、オリンピック競技場の広場で一休みする。現代のギリシヤ通貨「ドラグマ」は弱く、ヨーロッパの他の国では無価値であるので、「使い切るとよい。」というのであった。ギリシヤは観光で外貨を獲得している実情である。産物としては、ピスタチオ・ナッツ(ピスタチオアイスクリームは美味である)、オリブ、ワイン、貴金属細工品、ブロンズ彫刻品、魚貝類などがあげられる。翌八月五日、サロニコス湾には、英王室旗を掲げた大型ヨットも停泊していた。海洋国ギリシヤ文化は、紀元前六千年頃から、シュメール・セム・ハ

ム系民族登場から始まり、前四千年頃インド・ヨーロッパ系民族が登場し、バビロニア王国の成立、エーゲ文明、ミケーネ文明の繁栄をみ、ドーリア人がギリシアへ南下し、前八百年都市国家ポリスが成立している。

ミケランジェロの丘

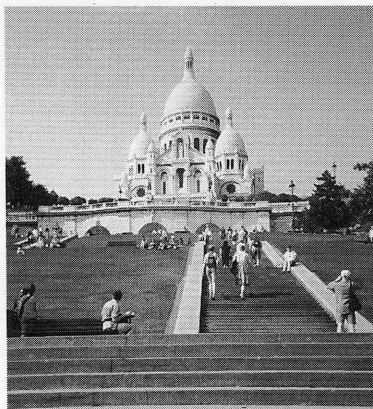
ルネッサンスの発祥の地、北イタリアを尋ねる前に、「Vedi Napoli e poi muori!」と土地の人は言っている「ナポリを見て死ね!」ゲーテの「イタリア紀行」一七八七年三月二日ナポリ。にも記されているが、私は、ゲーテとは反対に、イタリアをナポリから北上する旅を、あわたたしくすることになった。八月六日アテネ、ヘレニコ空港を九時〇五分オリンピック航空でローマへと向った。気温四十二度猛暑である。ギリシアからのテロ団を恐れて税関の検査は日本人には殊更厳し過ぎた。ローマ市内は猛烈な乾燥状態で、ジエラート、スイカ、が目を引いた。コーラ四百リラである。翌八月七日私と息子は、ツアーから離れて、ナポリ、(サンタルチア港が目的であった)ボンベイへ出掛けることにした。「二月二十九日ナポリ。…海の渚と湾と入江、ヴェスヴィオ、市街、洛外、城塞、遊

楽場……ナポリに来ると、みんなが気がふれるというのも無理ならぬ話であると思つた……」ゲーテは、噴煙の上るヴェスヴィオの熔岩の上も歩いている。二十世紀末のナポリの丘は、高速道路が幾層にも走り、下町は、第二次大戦時に空爆に会いスラム化したまゝで暗い。サンタ・ルチア港からは、ソレントへ向うフェリーも停泊していた。バスで少し走ると、わずかばかりの工業地帯があり、途切れると、貧しいバラックが建っている。ジプシー達は空き地をみると、無断で住んでしまふという。失業者対策として、ボンベイのガイドは外国人には許されず、現地人がにわか型ばかりの役目を果している。折りたたみ雨傘二万リラと観光地の物価は高過ぎる。翌八月八日(土)花の都フィレンツェを尋ねる。先ず、「ミケランジェロ公園」(丘)から市内を見渡す。領主、メディチ家の強力な財力をバックに花開いたというルネッサンス文化の象徴、花の聖母寺(ドウモウ)の美しさ、小じんまりした街全体の美しいたたずまいや、ミケランジェロ作「ダビデ像」を背景に、カメラのシャッターを切る。(等身大の凜とした青年ダビデ王である。)ウフィツィ美術館では、ポツテツチエリの「春」、「ヴ



ミケランジェロ公園よりフィレンツェを望む 1998年 Aug.

イーナスの誕生」に感銘した。ルネッサンス期の特徴ある深味ある紅と青の色調、ラファエルの「聖母子像」も、印象深い。八月九日、美しく豊饒の土地トスカナ地方では、今、ひまわり、ぶどう、オリーブ、トウモロコシ。西瓜、青菜の収穫期である。連なる丘々を眺めながらベニスへ向う。人々には、水に映る



サクレ・クール寺院の石段 1998年 Aug.

夜景とゴンドラのカンツォーネに惹かれて、橋々から声援を送ってくる。シエクスピアの頃、そしてベストの流行ったトーマス・マソン時にも、人々は陽光と、水を求めて北の国からやって来たのである。水に沈みそうな建物の、中世からの交易の場に思いを巡らせてみた。ベネチアングラスの工房にもその跡が残る。八月十日、ミラノ、スカラ座は、修復工事中であった。ゴシック建築のドウモウの広場では観光客がカンツォーネのバンドに耳を傾け、くつろいでいるが、エマニエル二世アーケードは、閑散としている。アーケード下の歩道は、色どりの大理石の花が咲き、一時の華やかさを夢を見させてくれる。

モンマルトルの丘

八月一日（火曜日）、アリタリア航空308便、九時二十五分発でパリへ戻る。

「二十才に寄す」—— 菱山修三 ——

うれしさはひとには告げず その胸のうちにひめておけ 肩に はたちの空をのせて っぺんたかく青空に消えている

モンマルトルの とある石段に おんなじはたちの小娘が 立ちつくして十字を切る 二十をかぞえる 石段の上で

サクレ・クールの鐘がなる わたる世間に 鬼はない ひるむな ひくなく おそれるな だれにも はたちのころがある

私の成人式の日、朝日新聞から切り抜き、随筆日記に貼ったままでいた。今年サクレ・クールの石段を昇ることができた。ジャンゼリゼ大通りを、日産「マイクロ」が走っている。息子は「ルノー」の展示車に試乗したという。

（心の科学担当）



サンマルコ広場にて 1998年 Aug. 筆者